

◆◆◆ 韓国の寺院を訪ねて ◆◆◆

ニューヨーク州立大学

伊藤 博
伊藤 宣

韓国の古今

私たちは十年ぐらいおきに韓国を訪れていま

すが、近くて遠い国と感じます。一回目は一九七七年で町々の道路標識や店の看板などはほとんどハングル語でした。日本語を話す人は日本の占領を経験した人の中にはいたのでしょうか、使いたがりませんでしたし、英語を話す人はインテリを除いてはほとんどいませんでした。冬でしたが、韓国の暖房設備オンドルのある宿を

見つけるのに会話が通じず苦勞しました。次からは、韓国の大学教授の友人夫妻が高層マンションに泊めてくれます。

一九九〇年頃にはだんだん漢字も町々のサインから姿を消し、ほとんどハングル語のみになりました。行きたい所に行くのは難しく、首都ソウルの駅の汽車のプラットホームがどうしても分からず、たまたま他の観光客を連れたガイドが英語を話していてその人に聞いて正しい列車に乗れました。

一九九九年に訪れた時は経済的にもどんどん発達した後でしたので、車は氾濫し超高層住宅も至る所に立ち並んでいました。日本人は庭のついた一戸建ての家を好むといわれていますが、韓国人は未だ治安上不安もあり、特に都会では警備の付いた高層住宅を好むようです。一番の驚きはハングル語に加えてそこいら中に英語やローマ字の標識が増えたことです。ローマ字だと意味は分からなくても発音できるので、随分移動しやすくなりました。汽車の行き方もハングルと英語と両方で書いてあり、ホテル、レストラン等も全部両方で看板に出していました。

一九七〇年代は冷戦の最中で北南朝鮮の分断点、板門店で強い印象を受けました。観光バスの前後に機関銃を装備した護衛のジープが走り自由の家、会議場などを見学するのにバスを降りるたびに乗客をMPがぐるっと囲んで物々しく護衛される格好となりました。非武装地帯の

帰らざる橋の横には絶えずエンジンをかけたトラックが止めてあり、北から逃亡して来たらその後すぐに追手を防ぐためにトラックで橋を封鎖するため、ものすごい緊迫感がありました。二〇〇二年南北両首脳の会談が開かれ鉄道が再開された今、動乱後の長い緊張関係を考えると「やっとここまで辿り着いたか」という感じがします。

ソウルのお寺

韓国には大きな有名なお寺がいくつもありますが、ソウル市内にあるのは曹溪寺でこの寺は韓国最大の派である曹溪宗の総本山になっていて、全国の一五〇〇万の仏教徒の八〇パーセントがこの宗派に属すと言われます。境内に行ってみると地方の寺院からの僧侶達と一般のお参り客で絶えず賑わっています。特に、お釈迦様の誕生日の前には、僧侶や信者が木と木の間や

町の中に吊す蓮の花、竜、星の形の提灯は見事なものです。骨董品や洒落た料理屋は喫茶店などがある仁寺洞のそばにあります。ソウルに寺が一つしかないのは多分李朝時代になって儒教を崇拜して、仏教を排斥したのと、特にソウルは李朝の都であったために仏教が衰退したためであろうと思われまます。

韓国に仏教が中国から伝来したのは四世紀後半の三国時代の頃でした。初めに高句麗に伝わり、次に五世紀初め、百済にそして最後に、新羅に伝わり、六世紀初めには仏教が国教と公認されました。七世紀には新羅は中国の唐の朝鮮支配を断念させ、半島を統一した後、高度な仏教文化を展開させました。王京（現在の慶州）に多くの寺院を建てたのもこの時代で、慶州の仏国寺の釈迦塔、多宝塔などの石塔美術、花崗岩をドーム状に築き上げて造られた石窟寺院、その中に安置された仏像などは新羅仏教美術の

代表的なものです。新羅が王位継承で力を落とし、三国が群雄割拠しましたが、その後十世紀になって今度は高麗が朝鮮半島を統一し、仏教は再び栄え、全国に多くの寺院が造られました。ソウルにはたくさんすばらしい王宮や庭があります。日本の植民地時代の旧朝鮮総督府のビルは一九九五年まで国立中央博物館として使われていて、非常に立派な建物でした。この建物は歴史的な怨念がなければ壊すのはおしい建物でした。壊されて無くなったことは韓国人の苦い思いを考えると当然ですし、李王朝時代からの正宮であった景福宮を隠すように立っていたのが取り去られて植民地時代からの威圧感が無くなったようです。

韓国の京都、慶州

千年以上も栄えた新羅の都、慶州は日本の京都のような町といわれます。ソウルから汽車で

四時間ちよつとですが、私達はソウル駅から快適な汽車の旅をしました。慶州は見る所が多いので英語の解説も付くという観光バスに乗りましたが、付き添いのガイドはほとんど英語が話せなかったので降りてタクシーに乗り換えました。乗ったタクシーの運転手はバスのガイドよりは年配の人でカタコトの日本語と英語を話すので助かりました。

慶州市は特に古墳が有名で二五〇基もあり、その一部が大陵苑として公園になっています。その公園にある天馬塚は直径四十七メートル、高さ十二・七メートルの円墳で中を見学することが出来ます。中からは一万二千点の副葬品が出土したそうで古墳の構造と一九三七年の発掘時の状態を説明した展示があります。公園は真っ青な芝がきれいに刈られ、なだらかな円墳が起伏をなして少しきれいに整備されすぎている感もしました。



次に、新羅王朝の仏教美術で有名な国立慶州博物館を覗いてみました。本館は新羅最大の寺院皇竜寺の遺物品が中心に展示されており、二つの別館では慶州市内の古墳から出土した副葬品が収められています。なかでも冠、ベルト、腕輪などの金属製品は黄金の国といわれた新羅の豪華さを思わせます。又、野外にも聖徳大王鐘や三層塔、付近の寺院から出土した石仏などが沢山展示されています。

芬皇寺は七世紀の半ばに善徳女王により創設された寺院で、立派な由緒あるお寺でしたが、度々の火災や元軍の襲来で、今は礎石を残すだけになっていました。ただ珍しい三層の塔が残っておりますが当時は五層であったそうです。四角の塔で灰黒色の石を切り出して積み上げたもので、初層には仁王像が八体浮き彫りにされており、また基壇の四隅には石獅子が置かれています。

市外からは十五キロほど離れた吐含山の斜面には韓国を代表する名刹仏国寺があります。六世紀前半に創建されましたが、以後何回も改修されました。特に木造建物は秀吉の軍の手により全焼してしまったので、残っているのは李朝後期以降のものと、復元された李朝様式の建物だけでした。仏国寺の伽藍は斜面に建てられているため重厚な立体感があります。そして、奈良の薬師寺にも見られる、七〜九世紀の統一新羅時代に発達したという伽藍配置が特徴で、東側に無説殿、大雄殿、双塔鐘樓が並び、西側には極楽殿があり、統一新羅時代の金銅阿弥陀如来が安置されています。本堂である大雄殿の前には二つの塔が並んでおります。大雄殿の中央には本尊の釈迦仏が安置され、その左右には菩薩像、十六羅漢像などが並んでいます。大雄殿は一七六五年に創建当時の基壇の上に再建されたもので、李朝時代後期の代表的な仏教建築に

数えられています。

仏国寺が建つ山の頂上に石窟寺院があります。日本海に向かって建てられており、私達が行った時はよく晴れた日で日本本土は見えないものの日本海は良く見えて日本と韓国の近さを感じました。仏国寺と同じ頃創建されたもので李氏朝鮮時代に仏教が弾圧されたために一九〇〇年頃再発見されるまで、長年忘れられていました。補修後は木造建ての覆いが掛けられたと言う意味で人工の寺院です。しかし、新羅文化の結晶と言われる見事な石積み花崗岩の石仏はとても荘厳です。天井は花崗岩を積み上げたドーム型で、主室には如来像が台座の上に座し、その周囲には梵天、帝釈天、文殊菩薩など、本尊の後ろには十一面観音が浮き彫りにされています。

光州の名刹、松光寺

光州は学生の抗議騒動で有名になった大学町

ですが、ここから四十キロ、バスで一時間半位の山の中に韓国三宝寺刹の一つ松光寺があります。やはり曹溪宗の寺で禅の根本道場です。新羅時代に創建され、高麗時代に普照国師知訥によつて寺が栄えたと言われております。バス停のある門前町を通り抜けると、なかなか雰囲気のある大きなお寺の参道に入ります。溪流の上にかかる清涼閣や羽化閣は韓国風の青がかったグリーンを中心とした極彩色の門で、ここをくぐり涼しい風を意識しながら山道を歩くと大伽藍の広がる寺の中心に出ました。五十余りの建物のある大きな寺で境内には仏教国際学院というのがあり、絶えず外国人も修行しているそうです。時々列になって修行僧が境内を横切つて行くのが目立ちました。朝鮮戦争の時に多くの建物が破壊されたそうですが、今はすっかりきれいに修復されました。今は博物館もあり木造三尊仏龕などの貴重な遺物がおさめられて



います。

松広寺を見学して門前町のバス停に出て来たのは二時過ぎだったと思いますが、そこで日本の方にたまたまお会いしました。「この割合近くにある華嚴寺を見たいのだけれどどうも時間が無くて」と私達が言うのと、バスを乗り換えて行けば十分に時間はありますよとのことでした。そこで、元氣を出して足を伸ばすことにしました。しかし、バス停、特に行き先があまり大きな場所ではないので分かり難く、最後に聞いた人は言葉が通じず、私達の手を引っ張って行って華嚴寺行きのバスに乗せてくれました。

華嚴寺は統一新羅の時代、八世紀に縁起祖師が開いたと言われています。バスを降りてしばらく歩くと智異山大華嚴寺と書いてある門に出ます。そこを通り過ぎると山門をくぐってから一時間も山道を歩くとやっと寺に出ました。

松光寺に比べるとかなり小規模の寺でしたが、

ここで一番古い建物は正面の大雄殿で、一六三六年に碧嚴大師により再建されたものだそうです。入り口からかなり遠いことや、私達が訪れたのが午後かなり遅かったこともあってあまり人ごみも無くかえって落ち着いたお寺らしい雰囲気味わってきました。

日本と韓国の僧侶の正座の仕方が似ているのに驚いたことがあります。バンコックのワットパクナムに参拝した際、多数のタイの僧侶達に混じって若い韓国の僧侶一人が一緒に読経しておりましたが、タイの僧侶が足を崩して座っているのに対し、韓国の若い僧侶は日本同様きちんと背筋を伸ばして正座している姿がとても対照的でした。これも小乗仏教との風俗習慣の違いかなと感じました。

儒教

寺院を宗教の場と考える私達には韓国に行っ



て儒教の寺院を見るたびに違和感が感じられます。儒教が人びとの道徳制度として根を下ろした時代から成人式、結婚式、葬式、それに先祖崇拝に結びつき大衆に溶け込んでいます。韓国の儒教的な思想では人生には何回かの角目があり、その節目のような時に起こりうる混乱を無事に通り抜けることが必要になるという前提で一連の行事を規定しています。昔は成人式は男子二十歳、女子は十五歳で公式に責任ある社会人となったことを確認しました。

結婚式は家族が社会の基本的な単位であることを確認し、先祖を尊敬し、家族の継続が保障されたことを公に表す行為です。新郎新婦の家長が結婚を決定すると、花婿の家族が花嫁の家族に手紙を送り彼らの運命を決定すると言われる生年月日及び生まれた時間を知らせます。日本や中国とは異なり韓国では伝統的に結婚式は花嫁の家で行われ、新婚夫婦は二、三日花嫁の

家に留まります。子孫を沢山つくり繁栄する人生を送ることが社会に対する義務でもありません。た。

葬式は家族のメンバーの死を悼み、残された家族が悲しみと恐怖を乗り越えることができるようにと意図されました。葬式は近親者のみならず、一族による手の込んだ行事となり、伝統的には喪の期間は二年間で、定期的に儀式を行います。

先祖崇拜は先祖の魂を敬い子孫への恵みを祈るため、過去、現在、そして未来永劫に親族親戚の結合を強めることを目的としています。今日でも敬虔な儒教者は両親、祖父母等、四世代にも渡ってその命日には儀式を行います。その他にも旧正月のような祝日には茶の儀式や墓前での儀式を行います。このような儀式は氏族の強い団結を呼び排他的になるとも言われますが、世代間の結びつきを強くし誇りを持たせます。

この儒教の伝統的な思想は家族と社会とを結ぶ強い絆として韓国の地域社会に残り、多くの伝統は今でも続いています。

シャーマニズム

韓国の伝統的な大衆信仰であるシャーマニズムには今でも幅広い支持層があります。韓国の土着信仰では人間の体には数個の魂が宿り時間や空間に妨げられず次の世でも永久に活動するか、新しい人体に入って甦ると考えられています。七つの星の靈魂、山や竜の靈魂等、自然の中にある靈魂や王、將軍、大臣等の歴史上の人物の靈魂のほか、悪霊もあります。

そして、シャーマン（祈祷師）は靈魂を慰めたり、靈魂と生きている人間との間を取り持つ霊媒の役を果たします。韓国のシャーマンには二種類あり、トランスで靈魂に選ばれた恍惚シャーマンは超自然の能力を持ち病を癒すこともでき

ます。この種のシャーマンは当初靈魂の呼びかけに抵抗した結果、病氣になったり失神したり、幻想に陥り、それを克服してシャーマンとなります。シャーマンの主な宗教的儀式は、具現する靈魂により異なる色の衣装を着、早いリズムの打楽器の伴奏で踊りトランスに入ります。手の平をこすりながら祈りを捧げ、靈魂の世界に入り靈魂と直接に伝達します。もう一つのシャーマンは相続によってシャーマンになった人たちで超自然的な能力は持つておらず、シャーマンと靈魂とは別々の正体を保ちます。儀式も単純な衣装をまとい、テンポが遅い打楽器や弦楽器や吹奏楽器で賑やかな音楽を使い踊り儀式を行います。

シャーマンは超自然的な能力を持ち主として部族国家の頃から地域社会の精神的な必要を満たすことができる宗教上のリーダーの役を務めていました。シャーマンの儀式は民族伝統に根

をおろし、三つの機能を果たすそうです。

第一に幸せを招く儀式は頻繁に行われます。

昔はこの儀式は王侯貴族の家庭から庶民に至るまで各家庭や村々で安全と繁盛を祈りました。

国の至る所に神社を建てシャーマンは音楽を奏で踊り祈りました。後になってこれらは村や町の共同の儀式や祭と発展していきました。

第二にシャーマンのみが病氣を引き起こす靈魂をコントロールできると信じ、皇室で危険な病氣が流行する悪い魂を追い出す為の儀式を行いました。シャーマンの家さえも病氣の靈魂から安全であると信じ病氣が流行するとシャーマンの家に避難したものです。個々の家庭でも恐れられていた天然痘の靈魂を追い出す儀式がしばしば行われました。

第二に韓国のシャーマンの儀式は死人の魂が天国に着き平安を見つけられるようにと意図されています。特に病氣や事故によって亡くなっ

た人のさまよっている魂を天に導くためにこの儀式が必要であると考えられていました。しかも、生存者に不幸をもたらさないための儀式でもありました。

韓国では道教も宗教文化の一角をなしていません。道教の陰陽の思想によると、奇数は縁起がよく、特に旧暦の五月の五日は一番の吉日でシャーマニズムと道教が合同でお祝います。この日は昔、農閑期を利用して始まったらしく、豊作を祈って儒教者とシャーマンたちが揃って峠に登ります。そして、儒教の神主が山の神をシャーマンが山の靈魂にお祈りした後、神社の前で、お面をつけた男女が舞踏を演じますが、この催し物は韓国の無形文化財にもなっています。韓国人の三割近くがキリスト教信者で社会事業に大きな影響力を持つとはいえ、熱心にお参りしている沢山の信者を見ると韓国もやはり仏教と儒教の国だと感じます。しかも、寺院を回って

みて狭義の宗教よりも幅広い精神文化を見た様な気がしました。

